

よくあるご質問（FAQ）

Q：無痛分娩で完全に痛みはなくなりますか？

A：個人差はありますが、多くの方が痛みの軽減を実感されています。

Q：無痛分娩の副作用はありますか？

A：稀に足のしびれや頭痛、低血圧などの副作用が生じることがあります。当院では安全対策を徹底しています。詳しくは説明文書を用いてお話しします。

Q：無痛分娩ができない人はいますか？

A：無痛分娩は多くの妊婦さんに安全に行える方法ですが、以下のような場合には実施が難しい、または慎重な検討が必要となることがあります。

◆ 無痛分娩が行えない主なケース：

- ・全身状態に重大な異常がある方
(例：重度の心臓病、呼吸器疾患、神経疾患など)
- ・麻酔に関する重いアレルギー歴がある方
- ・血液を固めにくい体質や抗凝固薬を内服中の方
- ・腰椎の手術歴や脊椎の病気がある方で、硬膜外麻酔が困難と判断された場合
- ・ご本人の同意が得られない場合

◆ 慎重な判断が必要なケース：

- ・妊娠中に合併症を発症している場合
(例：妊娠高血圧症候群、前置胎盤、胎児発育不全など)
- ・赤ちゃんやお産の状況によって早期の分娩や帝王切開が予想される場合
- ・ご本人のご希望と医学的判断が一致しない場合

Q：無痛分娩のメリット・デメリットについて詳しく教えてください。

A：

◆ 無痛分娩のメリット

1. 分娩時の痛みをやわらげ、リラックスしてお産にのぞめます

硬膜外麻酔を使って陣痛の痛みをコントロールします。痛みが軽くなることで、体力を温存でき、お産に集中しやすくなります。

2. お産への恐怖や不安が軽減されます

「痛みがこわい」「陣痛がつらかった」という経験から、次のお産に不安を感じている方にも安心していただけます。

3. 産後の疲労が軽くなり、回復が早くなることがあります

体力を温存できる分、出産後の育児スタートにも余裕をもてる方が多いです。

4. 赤ちゃんの状態に応じて、帝王切開へスムーズに移行できる場合があります

あらかじめ硬膜外麻酔が入っていることで、緊急の対応も比較的円滑に行えることがあります。

◆ 無痛分娩のデメリット・注意点

1. 麻酔による副作用が起こることがあります

血圧の低下、発熱、かゆみ、頭痛などの副作用が起こることがあります。重篤な副作用はまれですが、万

が一に備えて医師が慎重に対応します。

2. 分娩の進行がやや、ゆっくりになることがあります

痛みが少ないことでいきみにくくなる場合があり、分娩時間がやや長くなることもあります。そのため吸引分娩を行うことがあります。

3. 硬膜外麻酔の挿入が難しい場合があります

背骨の形や体格などにより、まれにカテーテルの挿入が困難な場合があります。その場合は無痛分娩を中止することがあります。

4. 無痛分娩が予定通りに行えない場合があります

分娩の進行状況や他の緊急対応により、計画通りに実施できないことがあります。

Q：当日の流れについて教えてください。

A：無痛分娩 当日の流れ

【1】来院・受付

- ・指定されたお時間にご来院ください（通常は朝8:30ごろ）。
- ・受付後、分娩室または病室へご案内します。

【2】診察・モニタリング

- ・担当医師が内診を行い、子宮口の開大や赤ちゃんの状態を確認します。
- ・分娩監視装置（NST）を装着して、陣痛や胎児心拍の状態をチェックします。

【3】硬膜外カテーテルの挿入

- ・手術室で麻酔科医が背中から硬膜外麻酔のカテーテルを挿入します。
- ・カテーテルは細いチューブ状で、分娩中も留置したままです。

【4】陣痛促進

- ・病棟に戻り、陣痛促進剤（点滴）を使って分娩を進めています。

【5】麻酔薬の注入と鎮痛開始

- ・適切なタイミングで（陣痛がつき始めたら）麻酔薬を注入します。
- ・痛みが和らいでいるか、状態を確認しながら少しづつ薬剤を追加していきます。

【6】分娩の進行

- ・痛みが軽減された状態で分娩が進みます。
- ・ご本人のいきみやすさに配慮しながら、赤ちゃんの誕生をサポートします。

【7】出産後のケア

- ・分娩後に硬膜外カテーテルは抜去します。
- ・出産後も麻酔の効果が残っている間は、安静を保っていただきます。
- ・麻酔の影響がなくなった後は、歩行や授乳も可能になります。

*補足事項

- ・入院当日に陣痛が起こらない、または十分な分娩進行がない場合は、夜間は陣痛促進を休止し、翌日朝から再度陣痛促進剤と硬膜外麻酔を行います。
- ・飲食について：詳細は事前説明時にご案内します。
- ・付き添い：感染対策のため、当日の付き添いや面会については病院の方針に従ってください。
- ・急な予定変更：お産の進行状況や他の分娩・緊急手術などの対応により、人員を確保できない場合は無痛分娩を行うことができないことがあります。